

システム・シミュレータ SM+ がもつ デバッグ機能のいろいろ

第10章では、SM+の機能のうち、比較的高レベルなシミュレーション機能について説明しました。SM+にはこのような高機能な機能だけではなく、一般的なデバッガがもつようなデバッグ機能もあります。

たとえば、指定したアドレス命令実行時にプログラム実行を停止させたり、特定のメモリ番地へのアクセス動作を停止させるブレークポイント機能、ブレークポイントに至るまでどのようなルートでプログラムを実行してきたかをCPUの命令レベルで追えるプログラム実行/トレース機能などです。

本章では、SM+のデバッグ機能について解説します。

11-1 プログラムの実行過程を確認できる「プログラム実行/トレース機能」

プログラム実行/トレース機能は、ブレークポイントに至るまでどのようなルートでプログラムを実行してきたかをCPUの命令レベルで追える機能です。

さっそく、プログラム実行/トレース機能を試してみましょう。最初に、第9章のBLINKプロジェクトをコピーします。ディレクトリ名はBLINK_TRACEとしてみました。単純にそのままビルドしてSM+の起動まで進みます。

SM+を起動したときには、main.cの内容だけの画面になっています。ここでは、記述したコード量が

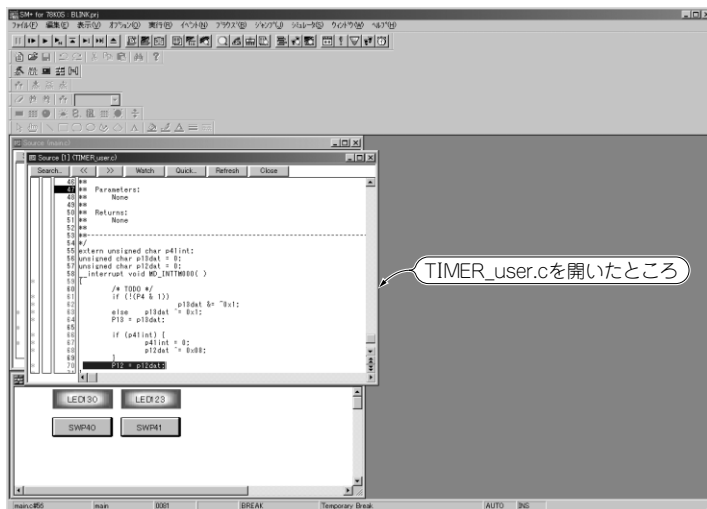


図11-1 ファイル・メニューから開くを選びTIMER_user.cを開く